

メディア報道を
読み解く技法



日時 2017年7月15日(土) 15:30~17:30
会場 成城大学 3号館 311 教室
講演 伊藤 守 (早稲田大学教授)
討論者 山本 敦久 (成城大学准教授)
司会 東谷 護 (成城大学教授)

メディア報道を読み解く技法



講演シリーズ開催のねらい

成城学園創立100周年・成城大学共通教育研究センター開設10周年を記念し、共通教育研究センターの教員がコーディネートした公開講演シリーズを開催します。

近年、教育の質保証のあり方として、アクティブ・ラーニング、反転授業といった方法が脚光をあびていますが、ややもすれば授業の進め方という形式的、表面的な改善に流れてしまうきらいがあるのではないのでしょうか。

こうした問題を念頭に「いま、教養教育を問う」を統一テーマとして、教養教育に関わってきた気鋭の研究者に、自身の教育実践と教養教育への考えを講演していただくことで、近年の教養教育のあり方を問う様々な議論に一石を投じる講演シリーズを企画しました。

第4回目では、ニュース報道の分析を通して日本のメディアが抱える問題を批判的に検討してきた伊藤守氏をお迎えします。本講演では、日常生活に深く浸透しているメディア報道が私たちのものの見方や価値観を作り出すメカニズムに着目することによって、学問知が大学を越えて市民のクリティカルな教養へと繋がっていくことの大切さをお話しいたします。来場された皆様にとって、メディア報道に対峙する「アクティヴ・オーディエンス」へと踏み出すための絶好の機会となるでしょう。

会場へのアクセス



小田急線「成城学園前」駅より、北口を出て徒歩5分
※小田急線「急行」は停車しますが、「快速急行」は通過となりますので注意してご乗車ください。

問合せ先

成城大学共通教育研究センター

TEL 03-3482-9556

http://www.seijo.ac.jp/education/support/ge-center/
E-mail: kyotsu@seijo.ac.jp

※参加費無料

登壇者の紹介

伊藤 守 (いとう まもる)

1954年山形県生まれ。法政大学大学院社会科学研究所博士課程満期退学。現在、早稲田大学教育・総合科学学術院教授、早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所所長、カルチュラル・スタディーズ学会会長。専攻は社会学、メディア・スタディーズ。

メディア・スタディーズの視座や理論を大学の授業にとどまらず、広く市民へと開くための活動を継続している。早稲田大学メディア・シティズンシップ研究所では、アカデミックと市民を繋ぐための様々な言葉、イメージ、実践を展開する場を作りながら、新しい／オルタナティブなメディア公共圏を創出するための研究を行っている。近年は、「情動」をテーマにして、日本のメディア報道のあり方を批判的に分析するための理論を構築している。また、福島原発事故の報道を事例にして、メディアと視聴者の間にある権力関係とイデオロギーを明らかにし、メディア権力と対峙するための理論や実践が、市民や視聴者の日常的な空間における教養や技法になることを目指している。

著書に、『情動の権力—メディアと共振する身体』(せりか書房、2013)、『テレビは原発事故をどう伝えたのか』(平凡社新書、2012)、『記憶・暴力・システム—メディア文化の政治学』(法政大学出版局、2005)、『よくわかるメディア・スタディーズ』(編著、ミネルヴァ書房、2015)、『ニュース空間の社会学—不安と危機をめぐる現代メディア論』(編著、世界思想社、2015)ほか多数。

討論者

山本 敦久 (やまもと あつひさ)

1973年長野県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程満期退学。現在、成城大学社会イノベーション学部准教授。専攻はスポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ。

著書に、『身体と教養—身体と向き合うアクティブ・ラーニングの探求』(編著、ナカニシヤ出版、2016)、『スポーツ観戦学—熱狂のステージの構造と意味』(共著、世界思想社、2010)、『「ハーフ」とは誰か—一人種混血・メディア表象・交渉実践』(共著、青弓社、2014)など。

司会・シリーズコーディネーター

東谷 護 (とうや まもる)

1965年神奈川県生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程修了。博士(人間・環境学)。現在、成城大学文学部教授。専攻は音楽学、大衆文化史、表象文化論。

著書に、『マス・メディア時代のポピュラー音楽を読み解く』(勁草書房、2016)、『進駐軍クラブから歌謡曲へ』(みすず書房、2005)など。

今後の公開講演「いま、教養教育を問う」

【#5】 2017年10月7日(土) 標葉 靖子(東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 特任講師)

「科学リテラシーはどこまで必要か」

※日程、登壇者、講演内容は変更になることがあります。